

A

問1 ア ① イ ⑤ ウ ② (3点×3)

辞書的な意味を最優先し、文脈との整合性を考える問題。自分が辞書的な意味を知らない語句がもし問われていたら、その場で文脈判断するしかないが、日々の学習で知らない語句に出合ったらすぐに辞書を引き、語彙力を高める勉強は怠らないようにしよう。語彙の問題の正解率だけではなく、読解問題の正解率も大きく左右する大切な勉強である。

B

問1 (3点×3)

(ア) 「たたらを踏む」は慣用句で、《勢い余って足踏みする・から足を踏む》の意。④が正解。ちなみに、「たたら」は「ふいご」と同義で、人間が足で踏んで空気を吹き送るための大型送風器具である。「たたら」「ふいご」は、鋳物を作る際の金属の精錬や加工に用いられてきた。不正解の選択肢も全て、「踏む」の語を含む重要な慣用句で構成されている。①「轍を踏む」は、《先人と同じ失敗を繰り返す》の意。前に「同じ」という語を付して「同じ轍を踏む」とも言う。②「薄氷を踏む」は、《非常に危険な場面に合う》の意。「薄氷を踏む思ひ」という心情表現で用いられることが多い。③「地団駄を踏む」は、《悔しさや怒りから、激しく地面を踏む》の意。⑤「二の足を踏む」は、《行動を決断できずにためらう・躊躇する》の意。

(イ) 「煩わされる」は「煩わす」の受身形で、「煩わす」とは、《(1)悩ます・心配させる、(2)面倒をかける》の意。本文では(2)の意味で使われている。③が正解。③以外の選択肢は「煩わす」の語意を逸脱し過ぎている。

(ウ) 「滅法」は《並みの程度でなく・甚だしく》の意で③が正解。「滅法」はもともと仏教用語で、「法」が「滅」している状態、つまり法則通りにはいかない《道理から外れた・常識外れの》状態を意味する単語であり、そこから《並みの程度でなく・甚だしく》の意になった。①「俄かに」は《急に・突然》を意味する重要語。②「概ね」の読みは「おおむ(ね)で、意味は《おおよその趣旨・大体・あらまし》。

C

問1 (7) ① (3点) 「不如意」は《経済的に苦しいこと・意のままにならないこと》の意。①が正解。④の「齟齬」とは《くいちがいがい》のことである。③は良い状況を意味している点で明らかでない。

問1 (4) ④ (3点) 「引立て」とは《目をかけ最真にする》こと、《「蒙る」とは《をを受ける》の意。④が正解。③は「乞う」が《をを求める》という意味であり、「蒙る」とは方向性が逆なので不適。⑤・①・②もそれぞれ語の意味が明らかに異なる。

問1 (ウ) ④ (3点) 「度を失う」の意味通りの④が正解。「平生」の読み方は「へいぜい」である。「度を失う」と同義の四字熟語に「周章狼狽」がある。③・⑤・①・②は明確に不適当。

D

問1 (3点×3)

ア ④ イ ① ウ ②

ア「怪訝」は《あやしみ、いぶかる》という意味で、「怪訝」の「訝」は「訝しむ」(いぶかしむ、と読む)の「訝」である。「訝しむ」は《不審に思う》という意味である。

イ「さばける」は《物分かりがよい》という意味である。ウ「おもむろに」は「徐に」と書き《落ち着いてゆっくりと》という意味である。「徐々に」の「徐」を訓読みすると「おもむろ」になるので、「徐に」と「徐々に」の二語は当然類義語である。

三問とも、文脈ではなく辞書的な意味で正解が決まっている。

E

問1 (7) (3点) 「盛装」とは選択肢②にある通りの

意味で、②が正解。③は同じ「せいそう」でも、傍線部の「盛装」ではなくむしろ「正装」の意味に近い。

①・④も同様。⑤は辞書的な意味上明らかに不適。

問1 (4) (3点) 「利発」とは選択肢⑤にある通りの

意味で、⑤が正解。①・②・③・④はそれぞれ辞書的な意味からズレている。「利発」のような登場人物の性質を表す語は、辞書的な意味を正しく覚えておきたい。

問1 (ウ) (3点) 「華奢」の読み方は「きゃしゃ」。「華

奢」とは選択肢①にある通りの意味で、①が正解。④・

②・③・⑤はそれぞれ辞書的な意味からズレている。「華奢」のような登場人物の様子を表す語も、辞書的な意味を正しく覚えておきたい。

F

問1 ア ① イ ③ ウ ③ (3点×3)

ア「やくたいもない」は「益体も無い」と書き、《役に立たない、無益な》という意味である。

イ「そうじて」は「総じて」と書き、《全般に、概して》という意味である。③「おしなべて」は「押し並べて」と書き、意味は《全体にわたって、概して》であり「総じて」と同義語である。

ウ「あたまをもたげて」の「もたげる」は「擡げる」と書く(この漢字はもちろん書けなくて良い)。「もたげる」が《持ち上げる》という意味になるのは、元々「もたげる」の語源が「もてあぐる」(「持て上ぐる」)という古語だからである。古文の「もてあぐる」から現代文の「もたげる」までの変化のプロセスは、「もてあぐる」→「もてあげる」＝「MOTAGERU」→(つま (TEA) のところ)が言ひにへいので、言ひにへいするうちに TEA が TA に縮まる) →「MOTAGERU」＝「もたげる」というプロセスである。したがって、「もたげる」＝「持ち上げる」という意味になる。

G

問1 (3点×3)

(7) 「間断ない」は慣用句で、《絶え間がない》の意。②が正

解。③「断続的に」は、《途切れたり続いたりする》の意なので、「間断ない」とは意味が異なる。

(4) 「放恣」は、《勝手気ままにだらしない》の意。④が正解。③以外の選択肢は「放恣」の語意を逸脱し過ぎている。

(ウ) 「余程」には二つの意味・用法がある。例えば、「だらけているよりは、余程勉強していた方がましだ」「あの大学に合格するとは、彼は余程頑張ったのだろう」など、「余程」が単独で使われている場合は、《程度が甚だしい、普通の程度を超えている》の意になり、「たいそう」「ずいぶん」などと同義語である。もう一つの用法として、「余程」が下に「くしように」とする「くしように思う」を伴うと、《もう少しで、あやうく》という意味になる。本文では「余程」が下に「くしように」を伴っているので、①が正解。